

マタイによる福音書 24:29-35

宗教改革者ルターが語ったと伝えられている「たとえ明日世界が滅びることを知ったとしても、私は今日りんごの木を植える」という言葉については、皆さんもご存知のことと思います。それは、この「それでも、私は木を植える」と言われていることが終末に臨む私たち信仰者の姿勢、態度でもあるからです。そして、私たちにそう促す言葉の一つがこの日の御言葉です。中でもそのことを最も力強く語ってくれているのが、「イチジクの木の教え」の最後のところで語られている「天地は滅びるが、私の言葉は決して滅びない」とあるこのイエス様のお言葉でもあるのでしょうか。ならば、私たちは、どうして、天地が滅びることを知りながら、新たな試みをなすことができるのでしょうか。また、どうして、日々の生業を変わずに同じように続けることができるのでしょうか。それは、変わらないものを信じているからです。それが、イエス様のお言葉です。では、その私たちがどうしてイエス様のお言葉をそう信じていることができるのでしょうか。それは、イエス様の言葉には嘘がないからです。だから、終わりが明日訪れることを知りつつも、希望をもって明日を信じ生きることができるのです。まただから、今一緒に告白した使徒信条の中で私たちは次のように告白するのです。

使徒信条の中段以降、下から6行目以降にはこう記されています。「天に昇り、全能の父なる神に座したまえり、かしこより来たりて、生けるものと死ねるものとを審きたまわん」と、つまり、終わりとは、神の審き、神様の決定的な判断が下される時だということです。そして、それがいずれ必ず訪れることを私たちは知っているわけですが、ですから、それは普通に考えれば恐ろしいことです。もしかしたら自分は、いやきっと自分とはと、あるいは、自分などが、自分なんかだと、ついついそんなことを考えてしまうからです。しかも、この日の御言葉にはこう記されてもいるのです。「その時、人の子のしるしが現れる。そして、その時、地上のすべての民族は悲しみ」と。ちなみに、そこで「悲しむ」と言われていることは、さめざめと涙を流す程度のものではありません。恐怖に絡め取られ、体を震わせ、言葉を失う、そんな人間の姿を語っているのです。そして、それ

が、終末が突然訪れ、そのことを知らなかった人々の姿だということです。ところが、私たちはそうではない、使徒信条のその先を見てみますと、終わりが訪れることを知りつつ歩む私たちの姿がそこにはこう語られているからです。

「我は聖霊を信ず、聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪の赦し、体の甦り、永久の命を信ず」と、使徒信条は、このように私たち信仰者の日常、信じるその内容について言葉にするのですが、つまりは、いろいろありながらも、こう告白するのが、私たち終末を待ち望む者の普段のあり方だということです。それは、イエス様の十字架と復活の出来事によって始まった神様のご計画が完成するその時を私たちが待ち望んでいるからです。だから、私たちは変わらずに同じように、主の日から主の日へと、この変わらぬ日常を歩み続けることのできるのです。ですから、私たちが希望を語ることができるのは、私たちが終わりの日の完成を待ち望む者であるからです。従って、もし私たちがこのように終末を見つめえない者だとしたら、私たちの語る希望とは、それこそ絵に描いた餅にすぎないことになってしまいます。それゆえ、もし私たちが終末を信じられずに福音を語ったなら、それこそ、それは、たらいに入った赤ん坊と一緒にそのままお湯を流すようなもので、愚の骨頂ということにもなるのです。

そこで、丁度いい機会ですので、前々から一度お伝えしたいと思っていたことをお伝えしますと、「生けるものと死ねるものとを審きたまわん」と唱えた後、礼拝文シートではどうしてそこで段落が切られているのでしょうか。使徒信条を告白する際には、是非、段落が切られていることを意識して、使徒信条を告白していただきたいのですが、それは、この段落の切れ目に言い表されていることが、先ほども申しました、「それでも」ということと深く関わっているからです。だから、私たちの信仰は信仰としての力を持ち、また深められることとなるのですが、それゆえ、この「それでも」というところを欠いた信仰は画竜点睛を欠くこととなり、生きて私たちに働きかけるものとはなりません。従って、この「それでも」というところが、信仰を深く知る上でのスイッチということにもなるのですが、それゆえ、使徒信条を告白す

る度に、私たちがこの「それでも」というところを深く自覚させられ、私たちの中でカチッと、スイッチが入ることが大事になってくるわけです。そして、このことを改めて強く感じさせられたのは、ちょうど一年くらい前のことでした。

その時、ある批評家の方がある研究者の言葉を引用してこんなことを語っていたのですが、そこで引用された言葉とは、敬虔なクリスチャンであるご両親を持つ、大村はまさんという研究者の言葉でした。教師としての経験も豊富な大村さんはある時、「私は教師として大変罪深いことを言ってきた」とこう仰ったことがあったそうです。そして、そう仰った理由を、授業で子どもたちに「分かりましたか」とこう問うていたと語ったそうです。そして、その評論家はこの言葉から「宗教というものを理解する際に、この『分かりましたか』ということがほとんど意味をなさないし、とっても危ないことなんだ」とこう仰ったのです。それは、宗教を知る、信仰が分かると言うことは、学習することとはまったく別次元のことでもあるからです。そして、そのことを語らんとして、その評論家は大村はまさんの言葉を引用したわけですが、それは、そもそもそのところで人が何かを学び、身体的な感覚を伴い理解するということが、初めから一つの正解が用意されているわけではないからです。ところが、教室という場所はどうでしょう。教師だけが正解を持っている、教師しか正解を持っていない、そんな雰囲気醸し出されていることはないだろうかというのです。しかし、本当は誰も正解を持っていない、だから、飽くなき探求を求めていくしかない、それも、みんなですそれをやり続けるしかない、クリスチャンでもあるその評論家の方は力を込めてそう語っていたのです。

ですから、そこで重要な点は、スイッチが入る入らないもさることながら、そこにはもう一つの大切なことがあります。それは、みんな一緒にということです。あの人がこの人が、ということではなく、また、牧師である私だけが、信仰深いと思われているあの人が、ということでもなく、こうして主の日を迎えている私たちすべてが、みんな一緒にというところで一斉にスイッチが入った、いや、そもそもそのところで言えば、主の日をこうして共にしているというところには、初めからそういう意味があるんだということです。なぜなら、この、みんな一緒に、と言うことが、こうして終末に備え生きる私たちのこの世での姿であるなら、このみんな一緒に、というところに、私たちが私たちであるというところ

ろが、神様の御前にあって現されることとなるからです。ですから、私たちが使徒信条をみんな一緒に告白するということは、そういう意味でのことなのです。

従って、私たちがこうして礼拝に集い、御言葉に聞くということは、私たち個人の理解、能力が問われているわけではありません。終末に備えるということは、私たちがこうして一緒に集まり御言葉に聞き、また賛美の声を上げる、このみんな一緒にというところを私たちがどう受け止め、今この時を生きているのか、このことが問われるものでもあるからです。そして、それが大事になってくるのは、私たちがイエス様が再びこの地上にやって来られることをみんな一緒に待ち望んでいるからです。芥川龍之介の蜘蛛の糸ではありませんが、そういう意味で、私たちの辞書には、自分一人だけが救われるという言葉はありません。ところが、私たちは、みんな一緒にということが分かりながらも、どうすれば自分は救われるのか、この自分だけは、というこの考えをどうしても捨て去ることができずにいるのです。それゆえ、またその反対も然り、自分さえいなければ、などと考えたりもしてしまうわけです。でも、そうであるからこそ、イエス様は仰るのです。あの人がこの人が、ということではなく、それでも、みんな一緒になんだよ、と。

ですから、この日の御言葉もそうです。終末が臨んだとき、何も分からず悲しむ人々がそこに必ずいることが記されておりますが、では、終わりを迎えたとき、悲しむ者が大勢いることがイエス様の望んでいることなのでしょうか。イエス様の望みはみんな一緒に、ということなのです。だから、人類すべてにとって、イエス様のお言葉は意味を持つわけです。そして、そのためにまた、私たちは世の人々とともに「同じ一つの現実」を生きているわけです。ですから、自分だけが、自分たちだけが救われればそれでいいという考え方は間違っています。この間違いゆえに、そうした考えを持つことは、私たちを大きな過ちに導くことになるのです。それゆえ、今私たちが直面する様々な問題の根底にあることは、この、自分だけが、というところに起因しているのは間違いありません。良きサマリヤ人の譬えにもあるように、自分の横にいる人が苦しんでいるその姿を見て、それを見てみない振りをしていいのか、自分だけ救われることが、本当に宗教、信仰と呼べるものなのか、終末を待ち望む私たちは、当然のこととして、このことを深く心に留める必要があるのです。従って、私たちがみんな一緒にこうして礼拝を献げ、みんな



一緒に終末を待ち望みながらその日常を生きているということは、そういう私たちが私たちであるための根源的な問いかけがなされているということでもあるのです。

そして、このことは利他ということでもあります。利他とはつまり、他者の利益を慮る生き方を私たちが選択し得ているか、ということです。自分だけが良ければそれでいいのかということです。それがイエス様の仰る、みんな一緒に、ということでもあります。それが十字架の上よりの、また、天の御国からのイエス様の一番の願いであるのです。そして、この願いの先に、終わりの時を見つめているのが私たち信仰者であります。その時の光景をイエス様は、29節から31節においてこう語ります。「その苦難の日々の後、たちまち太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は空から落ち、天体は揺り動かされる。そのとき、人の子の徴が天に現れる。・・・人の子は、大きなラッパの音を合図にその天使たちを遣わす。天使たちは、天の果てから果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める。」とすべてのものが一瞬のうちにパッと新しくされるその様をこう語るのです。そして、御言葉は、その瞬間を「たちまち」という言葉をもって語るのですが、それについて、ある学者は「その瞬間とは、「た・ち・ま・ち」などと言っている暇もないほどのものだと言っています。目を開け見ているその瞬間にぱっといきなり景色が変わっている、終末の訪れとはそれくらいの早さのものだんだ」とそう言っているのです。

このことはつまり、終末とは、人間が計り知ることのできないものであり、つまりは、人間の経験領域の外側にあることが一気に起こるものだということです。ですから、イエス様の再臨、パルーシアは、本来、私たちがどんなに言葉を尽くしたところで表現しようもないものです。ところが、イエス様はそれを私たちに分かるようにご自分の言葉で伝えてくれているわけです。そして、この言葉にならないものを人間の言葉として語ってくれているのが聖書の御言葉の一つの特徴でもあります。しかし、それは、終わりに限ったことではありません。天地創造についても、同じことが言えるわけです。つまり、人間が直接経験していないことが言葉にされ、それを信じ、受け入れているのが私たちであるということです。そして、それがどうして可能

なのかを一言で言い表しているのが、先ほども少し触れた「天地は滅びるが、私の言葉は決して滅びない」というイエス様のこのお言葉です。しかし、このイエス様のお言葉は、終末が訪れ、イエス様がこの地上にやって来られるその時にならなければ、本当の意味で分かるものではありません。ですから、それでも、との思いを抱き続けることは、私たちにとっては賭に出るようなものであり、この思いを抱き続けることは決して容易なことではありません。容易ではない、というよりも、それを続けることだけが目的になってしまったとき、誰もが挫折するしかないもの、そういうものなんだと思います。ところが、それをやり続け、その生涯を全うした人たちが私たちの身近なところでも数多くいるわけです。ですから、この実際にいる、ある、ということからもう一度考えていくなら、終わりを見つめつつ、それでも、との思いを私たちが抱き続けるということはどういうことなのでしょう。それを教えてくれているのが、イチジクの木の教えと言われている、このイエス様のお言葉です。

パレスチナでは周囲がまだ冬の様相を見せている時に、イチジクの木は芽吹き、若葉を出し始めるのだそうです。こうして人は夏などどこにも感じされないところで、夏が近いことを知るので、すなわち、それは、私たちの日本人の感覚からすると、まだ寒い冬が続いている中で綻びを見せる梅の花のようなものだと思います。このように、人はその始まりを知って、頭で、と言うよりも、身体的にまだ訪れてはいない将来を理解するのです。そして、それが許されているのは、その初めというものを深く受け止めているからでもあります。このイチジクの木の教えは、その点を語ってくれているように思います。つまり、終わりを思うということは、同時に初めを思うということであり、この初めを知ることがなければ、終わりを思うこともない、なぜなら、終わりとは、神様の御心が完成するその時であり、そして、この神様の御心は、その初めから変わらずにこの世界に止まり続けているものでもあるからです。

ですから、私たちが将来的な事柄を待ち望む上で語られている「しるし」というものは、私たちが状況を把握するということから考えれば、それは重要なことなのかもしれません。けれども、完成へと私たちを導かんとする神様の御心からすれば、それ

はどうでもいいことのようにも思うのです。なぜなら、その初めより終わりまで、この世界に止まっているものが完成へと導かんとする神様の御心であるなら、この御心はイエス様を信じる私たちの内側に深く刻まれているに違いないからです。では、その神様が刻んだものを私たちはどのようにして受け止め、また理解すればいいのか。それが先ほど申しましたイチジクの木の教えであり、梅の花のほころぶ様から春の近さを知ることです。つまり、神様の造られた一つの確かな道筋、その秩序の中に私たちがしっかり置かれているからこそ、私たちは始まりと終わりを知ることができるということです。

では、私たちがこうして生きている時間の中で、私たちにこの神様の秩序を身体的に教えてくれているものは何なのでしょう。それは、安息日と言われている主の日です。だから、十戒においても主の日を覚え、また守るように命じられているわけで、まただから、この安息日を守ればこそ、それもみんな一緒に守るからこそ、神の民は神の民とされていくのです。そして、この安息日ではありますが、旧約聖書においては、安息日は週の終わりの土曜日、正確に言えば、金曜日の夕方から土曜日の夕方にかけてを安息日と言っているのですが、けれども、イエス様を信じる私たちにとっては、安息日は日曜日であり、その日を私たちは週の初めと言っているわけです。それは、その日にイエス様が甦られたからであり、甦りのイエス様を覚え、記念するために私たちはこうして主の日を守り、イエス様と共に神様に礼拝を献げているわけです。まただから、この始めから終わりまでの歩みの中で、私たちは知るので。私たちが経験したこともない神様の御心を、また神様がなさったこと、なさろうとしていることを、主の日から主の日へと導かれる中で知らされるのです。

それゆえ、私たちが神様の御心を知るには、この繰り返しが大事になってくるわけです。安息日の戒めが十戒の中心点であると言われているのはそのためです。それは、神様の御心が分かるということは、この繰り返しの中で受け止められるものでもあるからです。それゆえ、みんな一緒にその日を休む、大人も子供も何もせず一緒にいる、安息日をそのように一緒に守るからこそ、私たちは私たちと共にいてくださっている神様とイエス様のことを、みんな一緒にいるがゆえに知ることになります。ですから、それは、日曜日だけで終わるものではありません。初めを思うということが終わりを思うということであるよう

に、移ろいゆくすべての者と共に深く関わってくださっているのが私たちの神様であり、イエス様であるからです。悲しみが必ず喜びへと変えられてゆくのはそのためであり、私たちが喜びで顔をほころばせるのは、その求める答えが初めから与えられているからではなく、ただただ神様の御心によって導かれているからです。だから、大村はまさんがおっしゃたように、「分かりましたか」と問うことは神様の御心の中に私たちが手を伸ばすようなものであり、それゆえ、罪深いと言うことになるわけです。

しかし、この罪深いということを実際の意味で知るために、私たちはどれほどの罪を犯さなければならないのでしょうか。大村さんの「罪深い」というその言葉の中には、どれほどのご苦労が表されているのかとも思うのです。けれども、彼女がそれを知ったのは、敬虔なクリスチャンであったご両親との主の日から主の日へと導かれる毎日があったからです。私は彼女が洗礼を受けたかどうかは分かりません。けれども、そこには、生まれてから召されるまでのご両親の祈りがあり、それゆえ、みんな一緒に、という神様の御心の中に彼女も置かれていた、それは間違いないように思うのです。ですから、罪に罪を重ねるしかない、そうした繰り返しの中で、私たちが終わりを思うと同時に初めを思うということがいかなることかと思うのです。それは耐え難いことなのかもしれません。しかし、そこに間違いなくあるのが神様の赦しであり、イエス様ゆえの救いなのです。そして、私たちは、安息日の度毎に、主の日の礼拝をこうして献げる度に、このことを知らされているのです。それゆえ、罪に苦しみ、しかめっ面をするのが私たちのあるべき姿ではありません。喜びで顔をほころばせているその姿、それが私たちのあるべき姿であり、それが、イエス様が私たちに最も期待する、終わりに向かって歩むその姿でもあるのです。それゆえ、その私たちが世にこれより遣わされるということは、まさに御心に叶ったことであり、世界人類にとって、大きな意味を持つことだとも言えるのです。そして、そこで求められていることが、「それでも」と「みんな一緒に」ということでもあるのです。ですから、そのことをしっかりと心に留めつつ御心を尋ね求め、この世と深く関わることのできる私たちでありたいと思います。祈りましょう。